

徳島県立農業試験場  
八十年史

昭和58年12月

徳島県立農業試験場





本館正面

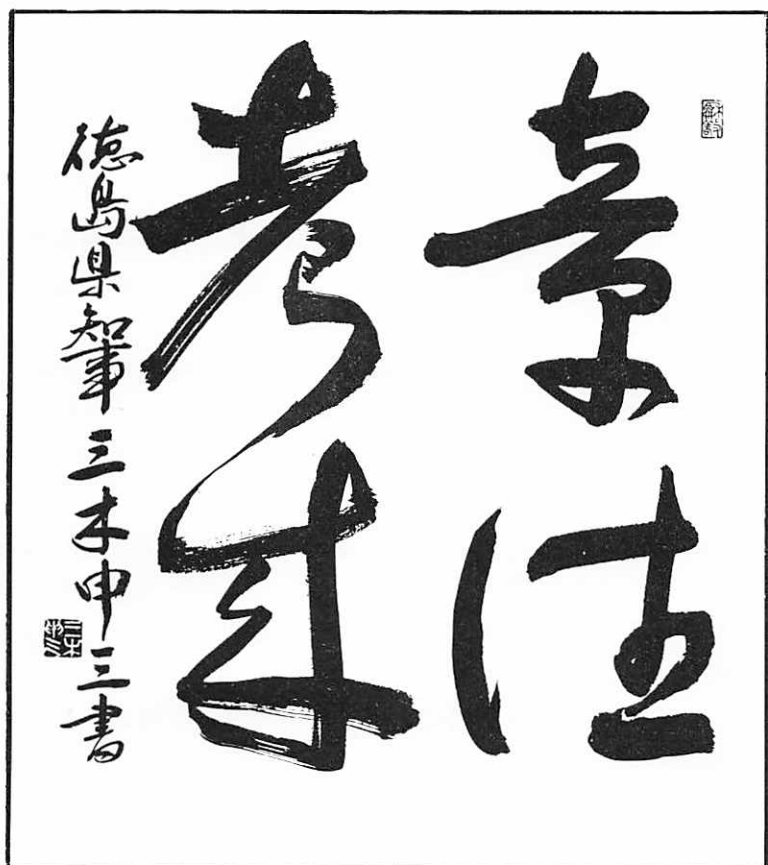


南側からみた全景（昭和58年）





徳島県知事 三木申三



# 序

徳島県知事 三 木 申 三

このたび徳島県立農業試験場におきましては、明治26年に名東郡加茂名村（現徳島市鮎喰町2丁目）に設立されていた農商務省農事試験場四国支場の廃止の後をうけて、明治36年徳島県農事試験場として発足してから80周年を迎えました。

顧みますとこの80年間、社会経済情勢の変化に伴い、徳島県の農業も大きく変化し、藍から養蚕へ、さらに大平洋戦争当時の主食の増産から野菜、果樹、畜産などの生鮮食料品の生産へと発展するとともに数多くの新しい技術の開発や導入が行われてまいりました。ことに戦後の技術革新は目ざましく、新しい機械や資材を利用し、農業生産の効率化をはかるとともに、有史以来の念願でありました米の自給を達成するなど農業の飛躍的發展を見ましたが、これらに果たしてまいりました農業試験場の役割は大きく、その功績は高く評価されております。

また農業試験場では戦前には農家の技術指導にも当り、併設されておりました技術員養成機関では数多くの優秀な卒業生を送り出し、現役の技術指導者として、また中堅農家の経営者として活躍されているところであります。

しかしながら、最近の農業は米、ミカンなど大部分の農産物が過剰基調にあり、さらに果樹、畜産にみられるように外国からの輸入拡大を強いられ厳しい時代を迎えております。

この対策として私は知事就任以来、地域特産物の育成や生鮮食料品供給基地の大型化を推進しておりますが、さらに長期的展望に立てば、食糧の自給率の向上、安定生産などもあり、農業試験場の今後の活躍に期待するところ誠に大なるものがあります。

このような状況下に80周年を迎え、記念誌を発刊することになりましたが、単なる研究成果のとりまとめばかりでなく、それぞれの研究課題を必要とした時代の背景や成果の普及効果などについても記載しており、いわば徳島県の農業技術史でもあります。

この輝かしい貴重な成果が今後の研究に生かされ、徳島県の農業発展に貢献されんことを念願しております。

昭和58年12月



## 発刊のこ と ば

徳島県立農業試験場長 山 本 勉

明治26年名東郡加茂名村に創設された農商務省農事試験場四国支場廃止のあとを承けて、明治36年に徳島県農事試験場が開設されてから今日までに80年の歳月が経過いたしました。

この80年の間に畜産、果樹部門の分離、独立、組織機構の改変、庁舎の改築、分場、試験地の設置あるいは廃止、本場の名西郡石井町への移転、農業機械化センターの統合など幾多の変遷を経、一方では幾度かの事変や戦争に遭遇し、社会、経済の大きな波に揺られながらも終始一貫して地道に研究を続け、さらに技術員養成所や農業講習所、農業大学校農業分校を併設して、農業技術者や後継者の育成をも担当し、また普及制度が確立するまでは農家の技術指導にも当たるなど徳島県農業発展のために力を尽して参りました。今、往時の研究報告書をひもとくとき、西欧やわが国各地の作物、農法などを積極的に導入してそれらの改良や定着に意欲的に取り組んだ創設当時の情熱と真摯な姿に始まり、変貌するそれぞれの時代の農業情勢に対応するため、ひたすら本県農業の発展を願いながら幾多の困難に打ち克って黙々と研究を続けてきた先人達が、80年の歴史の中に積み重ねてきた貴重な業績と貢献に対し、深く頭の下がる思いがいたします。

時潮の流れは激しく、今日わが国の農業は厳しい社会、経済情勢の中で、国内的には米の過剰を基調とした水田利用再編対策がここ数年来強く推し進められ、明年からは第3期対策が展開されようとしています。また国際的には農産物の貿易自由化を迫る米国をはじめ諸外国の圧力が急速に高まりつつあって、農業全体の生産力の飛躍的な増強と農業の体質強化が強く叫ばれ、これに果す試験研究の役割に大きな期待が寄せられています。こうした厳しい情勢をふまえ、国では今革新的な技術として黎明期を迎えているバイオテクノロジーなどの先端技術の開発とその利活用をも図りながら、21世紀に向けて農業の生産性を飛躍的に向上させ、わが国農業の長期的な発展と安定、国民食糧の確保を期するとともに、多様化、高度化する消費、需要への対応、緑資源の維持、培養と環境の保全などを図るために先頃「農林水産研究基本目標」ならびに「農業関係研究目標」が策定され、農業関係試験研究機関の大幅な再編整備が行われたところであります。

こうした重要な時期に私共は、農業試験場が歩んできた80年の歴史をふ

りかえり、先人達の足跡をたずねながら、明日の徳島県農業発展の一翼を  
になう試験研究がこれから歩むべき確かな道を探り、示唆を得たいと願っ  
て史誌の編纂を企画いたしました。

編纂の経緯と経過は「編集後記」に詳しく述べられていますが、開設以  
来初めての史誌とあって、いざ着手してみると80年の歳月に散逸した資料  
も多く、また第2次大戦中と戦後の混乱期には資料そのものが乏しく、正  
確を期するには多くの困難を伴いました。しかし県内外の関係機関、およ  
び試験場の先輩をはじめ多くの方々から史実の裏づけとなる資料や記録の  
提供をいただき、ことに元農林水産省農業技術研究所図書課からは明治35  
年創刊当初から昭和13年まで730号に及ぶ膨大な「徳島県農会報」を借用  
させていただき、古い時代の本県農業の姿をかなり正しく知ることができ  
たのは幸いでした。

資料の調査、執筆、編集は編集委員と幹事が中心となって進められまし  
たが、多忙な本来の業務の上に重なる馴れない仕事とあって、その苦労は  
並大抵のものではなかったと思われます。しかしこれら委員、幹事を中心  
とする場職員の努力が結集され、ここに「徳島県立農業試験場八十年史」  
を刊行する運びとなりましたことは職員一同とともに大きな喜びでありま  
す。そして、この八十年史が明日の徳島県農業発展のために「故きを温ね  
て新しきを知る」一助ともなれば幸いと存じます。

終りに、本史誌編纂に当たり、貴重な資料を提供され、また助言やはげ  
ましを賜わった各位に深甚なる謝意を表するとともに、多忙な業務の中を  
精魂を傾けて資料の収集、執筆、編集にあたられた職員に対して心からそ  
の労をねぎらい深く感謝の意を表する次第であります。

昭和58年12月



歴代場長



初代 木戸辰三郎  
明治36年～37年



第2代 向坂幾三郎  
明治38年～39年



第3代 山崎 熊太  
明治39年～43年



第4代 掛飛作太郎  
明治43年～大正2年



第5代 清水 勝雄  
大正2年～4年



第6代 早坂恒太郎  
大正4年～8年



第7代 間瀬鉦太郎  
大正8年～11年



第8代 石井 俊雄  
大正11～15年



第9代 東野市次郎  
大正15年～昭和10年



第10代 野坂 象之  
昭和10年～13年



第11代 佐野 吉雄  
昭和13年～20年



第12代 柏木小五郎  
昭和20年～22年



第13代 中沢 敏  
昭和22年～27年



第14代 山田 啓一  
昭和27年



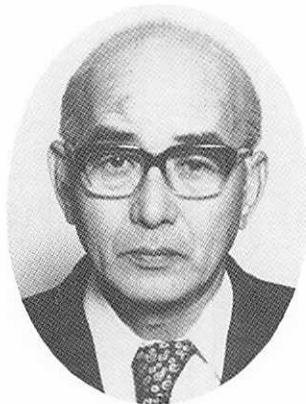
第15代 黒田 春三  
昭和27年～30年



第16代 原 敏  
昭和30年～39年



第17代 鈴江 昇  
昭和39年～47年



第18代 立石 一  
昭和47年～49年

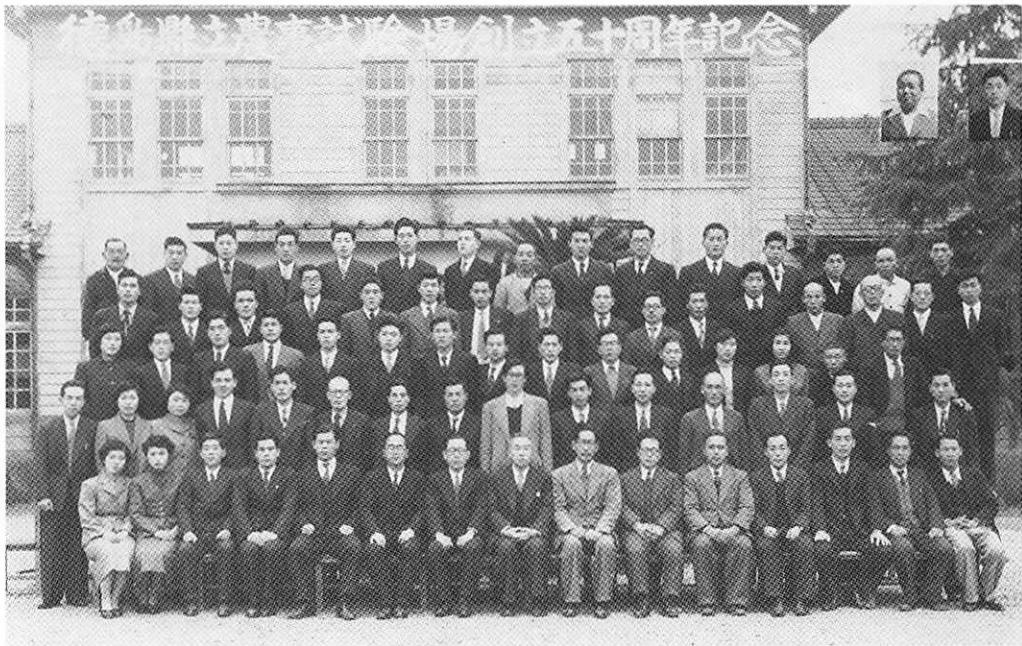


第19代 眞淵 敏治  
昭和49年～52年



第20代 矢野 明  
昭和52年～54年

職 員



農事試験場創立50周年当時の職員(分場を含む)

佐々木元近	野口 義弘	池本 五郎	梶野 十一	高橋 恒水	谷 幸泰	前田 知	土肥 源一	藤井 文明	善本 一昭	大伏 利治	上原 誠一	後藤田栄一	野口 利晴	山崎 芳隆	貴田 武捷	小林 尚
三木 利徳	岡田 一一	都築 恒美	藤田 育資	板東 真平	柏木弥太郎	以西 信夫	堀 千代二	豊田 壯逸	榎原初太郎	細川幸之助	山川 隆男	川人 住一	村上信太郎	多田 良行	海原 昭二	
大坂 高子	木村 春行	阿部 泰典	錦野 正臣	正木 武	吉岡 正八	城浦 治男	新居 清	笹田 悦仙	川真田芳樹	山本 庄市	村田 弘子	播磨ちか子	橋本 鶴吉	佐藤 靖臣		
岡田 公行	浅野 吟子	後藤富美子	篠崎 包治	川人 浩	北村 貢	矢野 明	甚上 正俊	後藤 恭	松岡 正信	小山 弘	多田 貞市	石井 博	横山 精治	姫野 皎		
土肥 槻子	武知美津子	富岡 芳雄	真淵 敏治	真淵 昭雄	土井健治郎	桂 澄人	黒田 春三	熊谷 栄	佐々木成則	石山多喜治	鈴江 昇	天野 晃	水口 博行	東條 勝男		

現在の職員（昭和58年）



本 場

浦上好博 新井明美

後藤田栄一 粟飯原理代

板東一宏 住友昭利

野本陽一 矢野敬二

石井鋭一 小川純一 小山 弘

本庄栄二 桑村照美

武知 宏 古藤英司 大石岩雄

三宅 節 野口義弘

井内 晃 川田富雄 宮田 昇

貞野光弘 佐竹治男

黒島忠司 広田年信 阿部泰典

金磯泰雄 柏木弥太郎

岡田俊美 藪内和男 山本 勉

加々美好信 林甚太郎

川口公男 酒井勇夫 永井洋三

川島正義 高橋恒水

林 捷夫 久米彰一 原 春雄

中野隆司

芝原 弘 森 良英

谷本温暉 大柳 明

福田英治 町田治幸

鎌田 茂 大石 宏

元木康博 七条サユリ



池 田 分 場



海 南 分 場



筈 試 験 地

丸尾 包治

井坂 利章

伊野 耕司

福岡 省二

隔山 普宣

細川幸之助

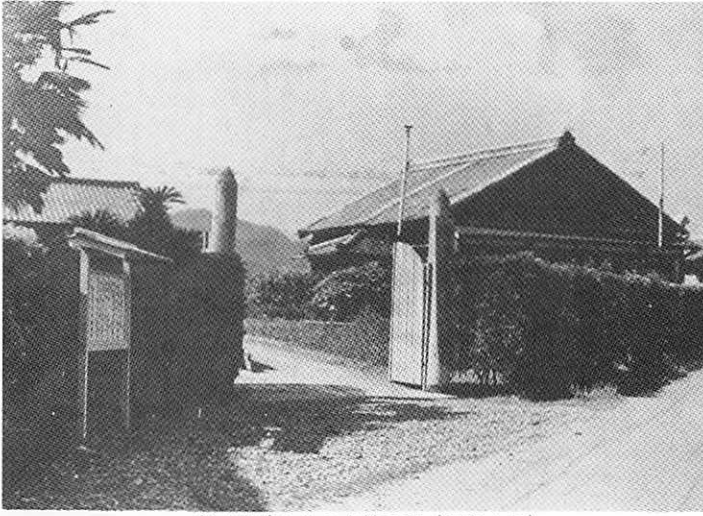
久保 春好

川下 輝一

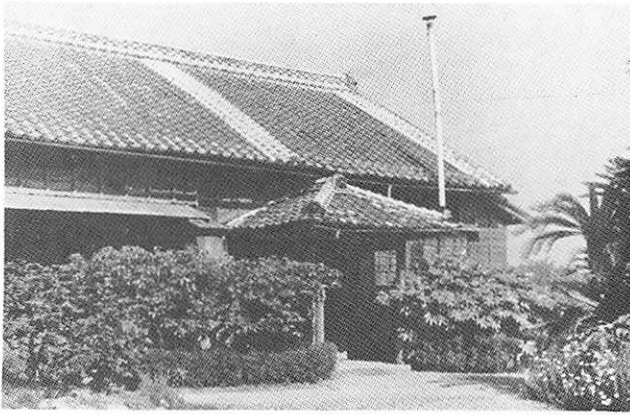
長居 勝美

高橋 陽子

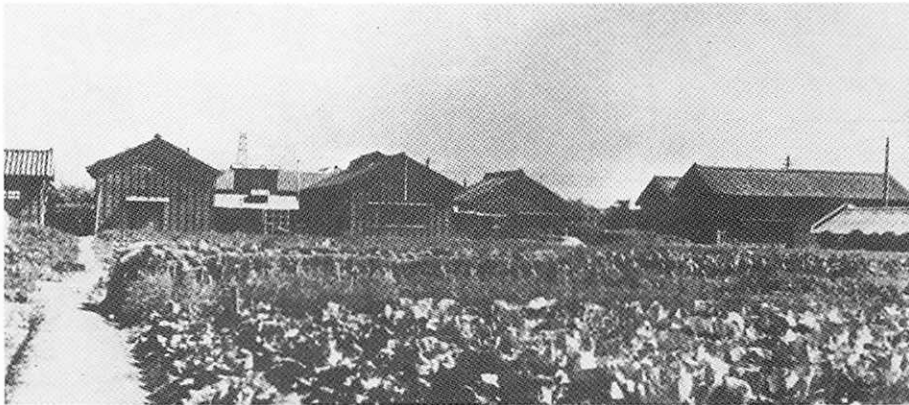
庁舎の移り変わり 本 場



創立当時からの本館正門（昭和2年）



本 館（同上）



南側からみた全景（同上）





改築後の本場正門と本館（昭和45年）



本館



南側からみた全景（昭和45年）



本館南西側（手前は作物科）



作業室と作業広場（共に昭和45年）

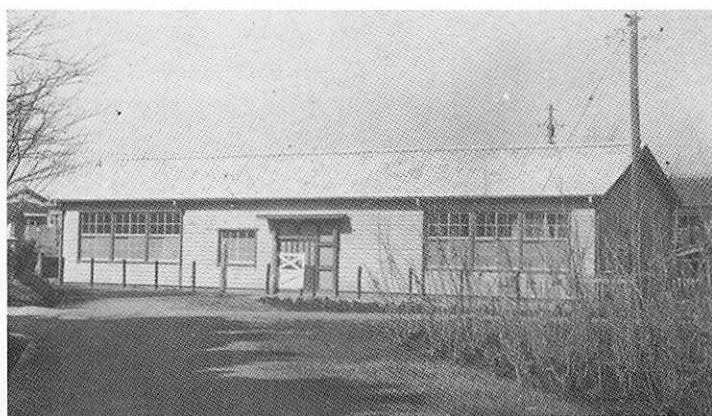




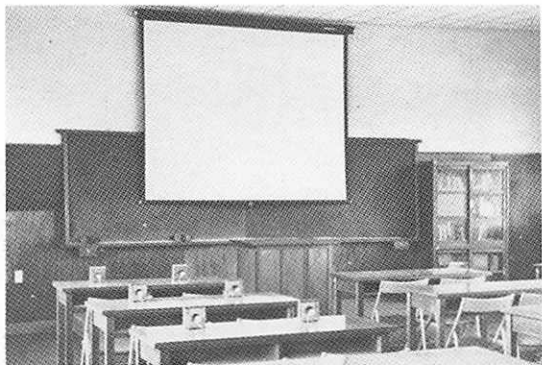
庶務係，場長室と裏庭（昭和40年）



農業機械研修館（昭和38年）



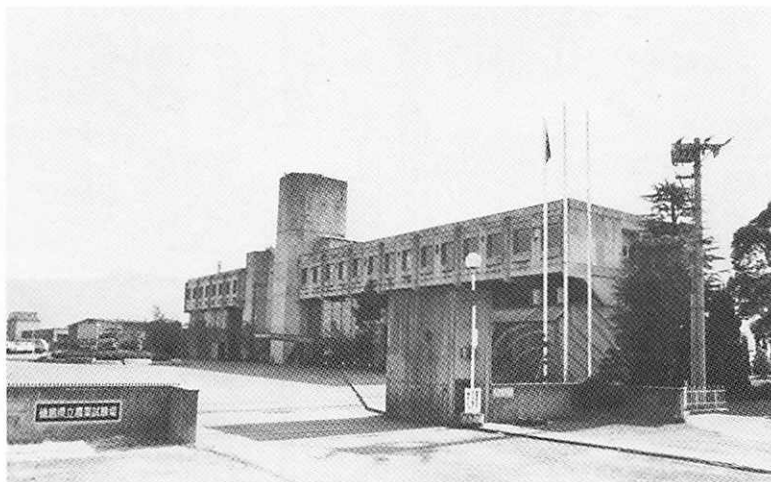
農業講習所教室（昭和20年）



農業講習所視聴覚教室（昭和36年）



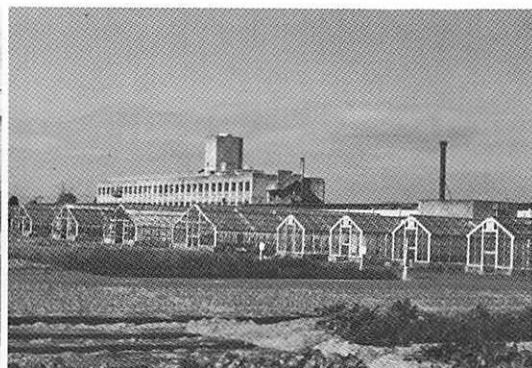
農業講習所寄宿舍（昭和24年）



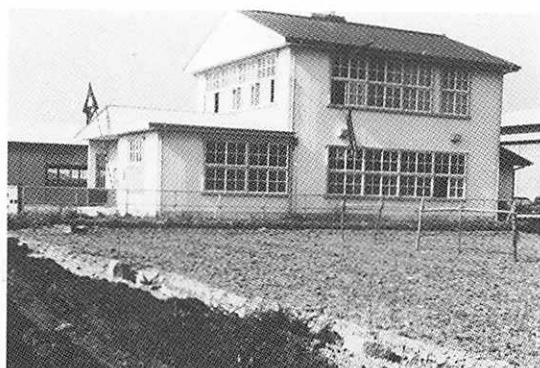
正門と本館（現在）



調査室および作業舎群



南側からみたガラス室群と本館



農業機械化センター（藍住時代昭和38年頃）

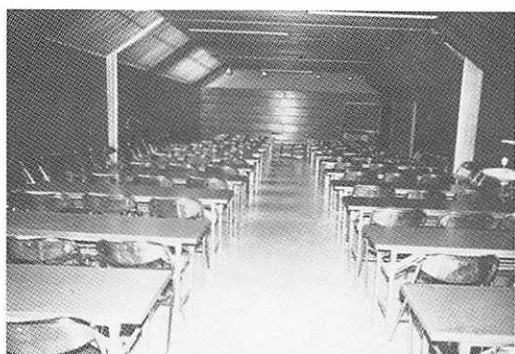


機械研修館（現在）

本館内部



玄関ロビー



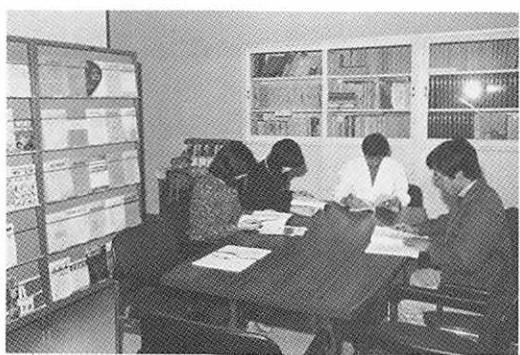
第1会議室



場長室



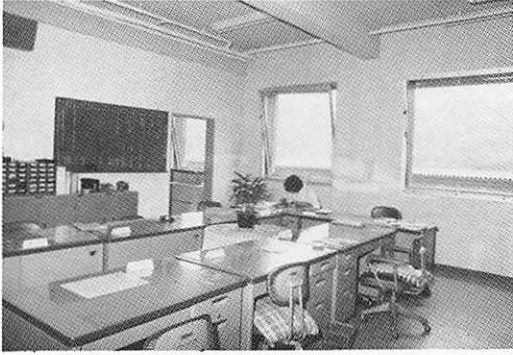
総務課



図書閲覧室



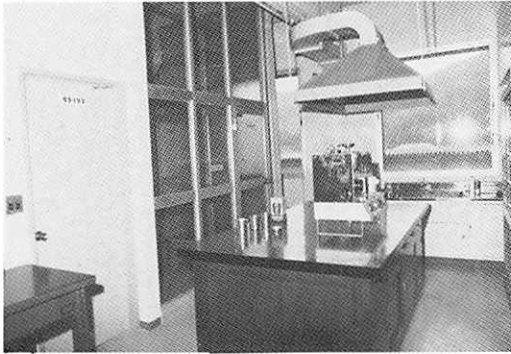
書庫



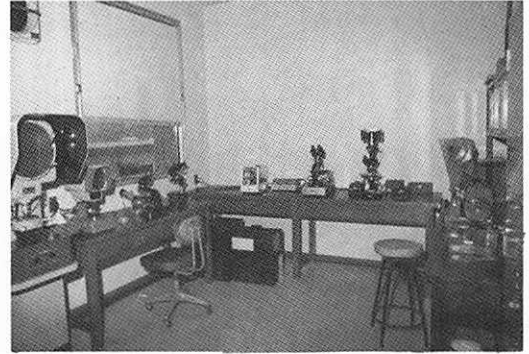
研究室



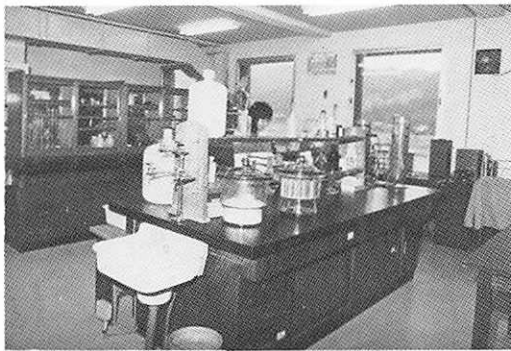
発生子察実験室



農薬実験室



顕微鏡室



公害実験室



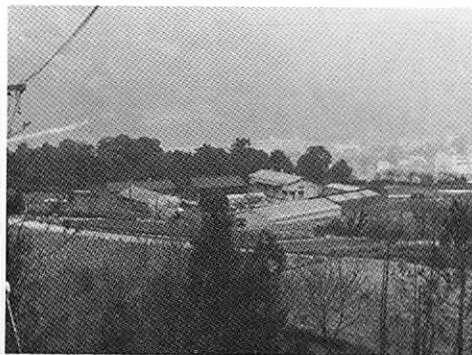
農業機械格納庫



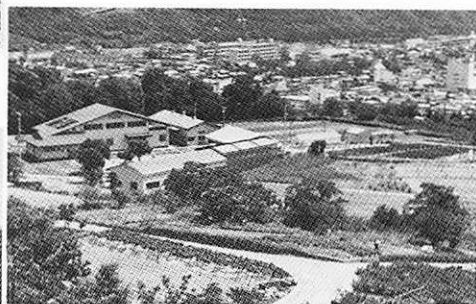
池田分場



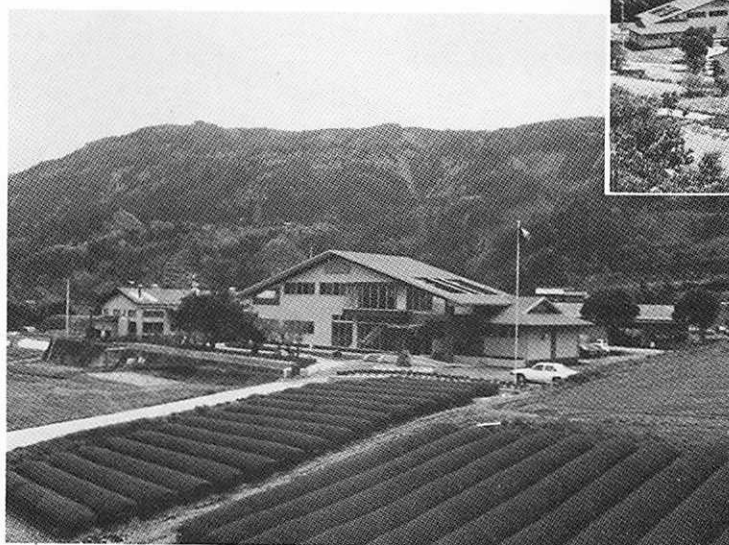
池田分場本館（昭和57年5月）



南からみた全景（同左）



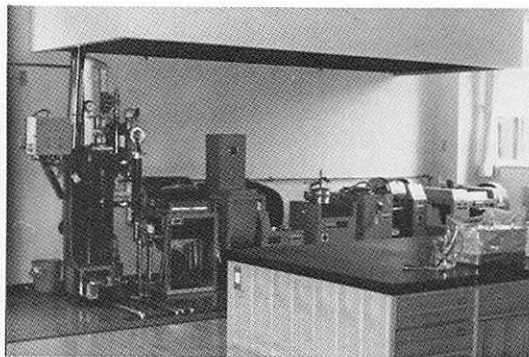
南からみた全景（同左）



改築成った池田分場本館（昭和58年）



玄関ロビーと事務室



実験室と少量製茶機

富岡分場・藍住分場



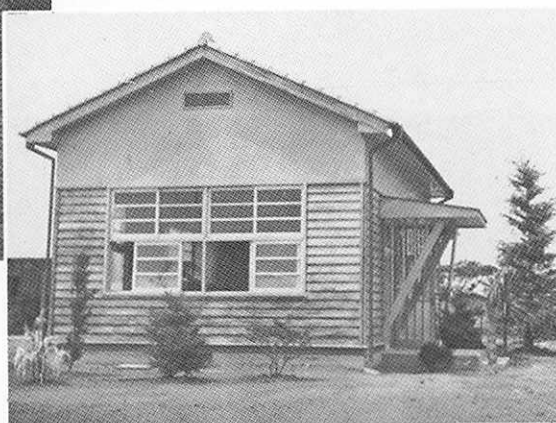
富岡分場の前景（昭和30年頃）



廃止前の富岡分場（昭和43年）



設立当時の藍住分場前景（昭和30年）



東側からみた藍住分場本館（同年）

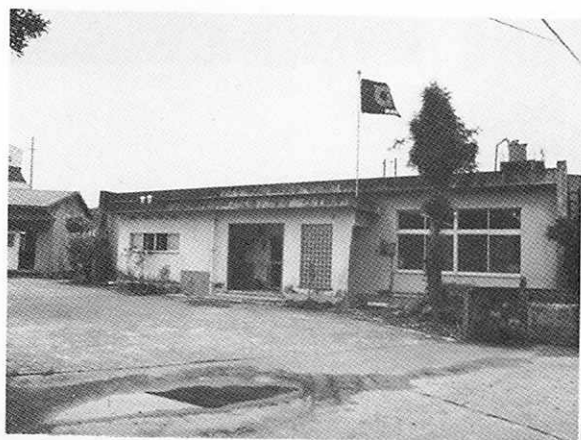
海南分場・阿南筭試験地



東からみた設立当時の本館（昭和32年）



移転前の海南分場の裏門と本館（昭和40年）



現在の海南分場と日和佐農業改良普及所海南支所



ハウスおよびガラス室



阿南筭試験地（昭和57年）



実験用竹園